

2016年5月1日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書 13章 1～5節

説教「悔い改めなければ」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

主イエスが群衆に話しておられると、何人かの人に来て、都で凄惨な事件があったことを伝えました。ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたというのです。ピラトとは、主イエスの裁判に関わることになるあのユダヤ総督ポンティオ・ピラトです。詳細は分かりませんが、神殿で礼拝していたガリラヤ人が無残にも殺されるということが起こったのです。残忍なピラトならやりかねないことでした。このショッキングなニュースを聞かれた主イエスはこう言われます、「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」（2～3節）。

そして主イエスは、その頃起こった別の出来事をこんどはご自分の方から語られます。シロアムの池のほとりにあった塔が倒れて 18 人ものが死んだという事故のことです。これも内容はよく分かりません。ただこちらは悪意で仕組んだ事件ではなく、思いがけない事故だったのでしょうか。これについても、主イエスは「あの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」（4～5節）と言われました。

これら二つの突発的で衝撃的な出来事は、死んだ人たちがどうしてこんな不幸な目に遭わないといけなかったのか説明がつかないだけに、その人たちは罪深かったから神の審きがくだったのではないかと噂する人たちもいたようです。しかし主イエスは、そうした人々の通俗的な考え方を否定されます。被害者たちは、確かに尋常ならざる死に方をしたのですが、だから普通の死に方をする人たちよりも罪深かったのだとか、滅ぼされたのだということではないと言われます。

事件や事故が起こった時、どうしてそうなったのか、その原因究明をすることはもちろん大切です。けれども、そこで根拠のない理由や原因をでっちあげ、何かの報いだとかバチが当たったとかといった因果応報的な結び付けを、私たちは決してしてはなりません。それは苦しんでいる人をいっそう苦しめることになるだけです。

旧約聖書ヨブ記に登場するヨブの 3 人の友人たちは、ヨブの見舞いに来たのですが、ヨブの中に何か不幸の原因があり、それを認めさせようとしたため、ヨブを余計に苦しめ悩ませたのでした。ヨブは彼らと戦い、神もこの友人たちの言葉をよしとはされませんでした。また、主イエスの弟子たちが生まれつき目の見えない人を見かけて、その原因は本人にあるのか、両親にあるのかと問うたとき、主は「本人が罪を犯したからでも、

両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」(ヨハネ 9:3)とされました。

主イエスは人間の勝手に因果応報的な見方を退けられ、個々人の苦しみや悩みと人間の罪とを直結させることはされませんでした。しかし、だからといって主イエスは、私たちの身の回りでおこる悲しみや痛みを、ただ仕方がないから諦めなさいと言われたのではありません。「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」と警告されたのです。主イエスは、神に逆らう民が全体として滅びの危機にさらされていること、私たちもみな滅びの淵にある者たちであること、そして終わりの日の神の審きのもとに立たされることを覚えなさい、と言われるのです。

「あなたがたも悔い改めなければ」と主イエスは言われます。ただし、この警告は神に裁かれて滅ぼされないための手段として、罪を認めて悔い改めることが必要だということではありません。もしそうなら、悔い改めない人はその報いとして苦しみを受け、悔い改める人はその報いとして救われるというということになって、主イエスも結局同じような応報思想を語っておられることになってしまいます。そうではありません。悔い改めるとは、神を仰ぎ、神に立ち帰り、神と向き合うことです。

私たちはともすれば悔い改めということを道徳的なイメージでとらえてしまいがちです。すると、自分は人と比べてそれほど悪人ではないから、今のところはそれほど悔い改める必要がないということになりかねないのです。悔い改めがどこか他人事になってしまいます。

あのヨブが最後に悔い改めたというとき、それは彼がこれまでの苦しみを自分の罪のためであったと認めたというわけではありません。主なる神が彼の前に現れ、語りかけられたとき、彼は神こそが主であり、この世界と自分を支配しておられる方であることを認めたのです。

「悔い改めとは、私たちが平生見落としている最も近くにあるものへの立ち帰りにほかなりません」とある神学者は言いました。神が私たちの最も近くにおられる、この単純で自明なこと忘れて、自分の正しさで、自分が中心に立っていると思っているところから、私たちの生の中心におられる方、私たちを憐れみと恵みをもって招いてくださる方のもとに立ち帰ることです。

私たちは、自分自身もまたこの罪深い世界の一員であることを認めざるをえません。この地上で起こる混乱に巻き込まれ、共にうめき苦しんでいます。しかし、そのような日々の出来事の中で、喜びと悲しみの中で、幸せと不幸せの中で、私たちは主イエス・キリストが生きて働いておられること、そこに示された神の憐れみと恵みの確かさに目を開かれていくのです。イエス・キリストを私たちの唯一の主として受け入れていくのです。それが私たちに求められている日毎の悔い改めなのです。